

英米文化の背景

「英米人の迷信・俗信」考(3) II 「死」

—— その2 「死の切迫・死亡・死者浄め・葬儀準備・通夜・弔問」

藤 高 邦 宏

岡山理科大学理学部

(1994年9月30日 受理)

はじめに

人も動植物も、この世に「生」を受けたものはすべて、必ずや「死」を迎える。人々は太古の昔より、誰しものが避けて通ることのできない「死」という一大問題について考えてきた。例えば、「死はすべての終わりを意味するか」という問題もその一つであり、それは昔も今も同様に人々の関心事と言えよう。

この問題に対しては、古来、世界のいずれの文化においても、人々は「来世の存在」を信じてきた。この「来世」とは「未来」の一つである。他の生き物とは異なり、その言語システムに「未来表現形」を持っていることから窺われるが、人間は「未来について思索せずにはいられない生き物」なのである。その点では、「来世の存在」という人々のこの確信は、ごく自然な成り行きの中で誕生したものと言えそうに思える。

いざ死者が出ると、人々はそれぞれの「風習」に従って弔いをするが、その「風習」は「来世の存在」というこの確信と結びついている。例えば、やや風変わりな風習に「アイランドの通夜」があるが、そこでは「死者を囲んで飲み食いをし、歌い踊るのお祭り騒ぎをする。だが、誰も涙を見せたりはしない」のである。この「風習」にはいろいろな解釈があるが、その一つに、「死者は苦しく悲しい現世を去り『来世』で永遠の生を得るのだから、涙を流して悲しむどころか、むしろ大いに祝福すべきだ」との解釈がある。

当シリーズの今回は、「死の訪れ」から「葬儀準備」「通夜」「弔問」に至るまでの、英米人の古今の「風習」のあらましとともに、そこに見出される極めて多様な「迷信・俗信」をやや詳細に考察する。またその際、いくつかの事項については若干の議論をも試みたいものである。

1. 死の訪れの時刻

今日では、人の死が潮の干満と関係があると信じる者は、まずいないであろう。しかし、かつてはこれが信じられ、特に海洋国英国の海岸地方や船乗りたちの間では、固く信じら

れていたようである。

* 「人が息を引き取るのは引き潮時」¹⁾とされた。E. & M. A. Radford は、「潮の変り目には温度変化が起き易く、それが瀕死の人に影響を及ぼすのかもしれない」と述べ、またこの用例として、C. ディケンズ作『デイヴィッド・コパーフィールド (*David Copperfield*)』(1849-50) のペゴティ氏の言葉を引用している。²⁾

‘People can’t die, along the coast,’ said Mr. Peggotty, ‘except when the tide’s pretty nigh out. . . . He’s a going out with the tide. It’s ebb at half-arter three, slack water half-an-hour. If he lives till it turns, he’ll hold his own till past the flood, and go out with the next tide.’³⁾

「海辺じゃ」ペゴティさんが言った。「潮がかなり引かねえと、人は死ぬは
ずがねえんです。…この男も、引き潮とともに亡くなりますて。三時半が干
潮、三十分は潮だるみじゃで、もしも潮が変わるまで生命が持つとすりゃ、
満潮過ぎまでは大丈夫でしょうて。そいで、次の引き潮で息を引き取りまし
ょうて。」

この「引き潮時死亡説」については、それが古代ギリシア人にも確信されていた点から
も、その起源は海を見て暮らした太古の時代の人々の知恵にある、と推測される。従って
この説は、ブリテン島でも古くから確信されてきたものと思われる。尚、上掲のディケン
ズ以前では、W. シェイクスピアの『ヘンリー五世 (*King Henry V*)』(1598-9) にもこの
例が見られる。次の引用は、酒場の女主人クイックリー夫人の台詞の一部である。

. . . 'a [Falstaff] parted even just between twelve and one, e'en at
turning o' the tide :⁴⁾

. . . フォールスタッフさんは、ちょうど十二時と一時の間、つまり潮の境
目にお発ちになった（亡くなられた）のだよ。

ところで、Radford は、「シェイクスピアの時代には、この説が一般に広く信じられてい
たことは明らか」⁵⁾と記してある。しかしながら、Edmond Malone は「女性たちの間では
通用していた」との Johnson の半肯定論に言及している。⁶⁾ 推測するに、後の十九世紀半
ばのディケンズがこれを使ってある点からも、シェイクスピアの時代には「広く」かどう
かは何とも言い難いが、少なくともそれが信じられていたことは間違いなからうと思える。
こうした場合には、たとえ作家の用例が見られるとしても、同時代の世人がそう信じたか
どうかを判定するのは極めて難しい。というのは、作品の中で扱われている時代、場所、
人物等についての作家の意図を把握し、それをその世界の現実状況と照合するのが非常に
困難に思われるからである。

* 「人が死亡するのは、月が欠けていく（欠けた）時」⁷⁾ともされた。自然法則からも、月の満ち欠けは潮の干満と繋がるので、こう信じられたのも当然であったろう。この確信は、特に海のない内陸部に住む人々にとって、都合のよいものであったと思われる。

* 「船上での病人等は、陸地が見えるまでは息を引き取らないもの」⁸⁾と信じられた。

2. 瀕死者への助力

場合によっては、瀕死者の者に手を貸し、その死を楽にする方策が講じられた。これは瀕死者への真の愛情故の方法であり、また神の許しを乞うた上での善処策でもあった。

* 「家中の鍵をすべて開け、かんぬきも外し、また、結んであるものもすべて解く。」⁹⁾ こうすることで、死に瀕した者はこの世との繋がりから解放され、その魂は戸口や窓から楽に出て行ける、と信じられた。W. Scott の *Guy Mannering* (1815) に次の用例がある。

“And wha ever heard of a door being barred when a man was in the dead-thraw? — how d’ye think the spirit was to get awa through bolts and bars like thae?”¹⁰⁾

「それで、人が死にかかっているときに、ドアにかんぬきがかげられるなんて話を、いったい誰が聞いたことがありますか？ — 一人の魂が、どうやって、こういう留め金やかんぬきを通り抜けて逃れ得たと思いますか？」

* 「瀕死の状態にある者の枕を取り除く。」これを行うときに、「急激に実行することによって、当事者にショックを与える方法がよく採られた」と言われる。¹¹⁾

* 「何度も息を引き取りそうになり苦しむ者を、土間の土の上に横たえる。」¹²⁾ こうすることによって、死の運命にある者が「母なる大地」の「太女神」に導かれるように、と願ったのである。

* 「死期の近い病人は床板の上、特に床板と並行に寝かせてやるのがよい」¹³⁾とされた。これは、大昔に土間にわらを敷いて生活していた時代から、床板のある家での生活をするようになってからの伝承であろう。

* 「瀕死者の使っている寝具で、羽毛の入ったものがあれば、それを取り除く。」古来、ハト・シャモ・その他野鳥類の羽毛の入った枕、マット等は人を死から保護する、と信じられた。¹⁴⁾

今日では、これらの事柄を信じる者はまずいないであろう。これらの俗信は、現代における「安楽死 (euthanasia) の問題」と直結するものと思われるが、かつてのこうした俗信の背景にもやはり、「瀕死者のためを思い、その苦痛の減少に助力する」¹⁵⁾ という当人への愛情が、その基盤にあったことは確かであろう。

3. 「溺れる者はそのままに！」

俗信の中には、考えようによっては実に「非情」とも思えるものが現にある。

* 「溺れている者を見ても、またその者に助けを求められても、そのままにしておくのがよろしかろう」¹⁶⁾とされる。これに関連する作品として、T. S. Knowlson も取り上げているが、W. Scott の『海賊 (*Pirate*)』(1821) に次の一節がある。

“Are you mad?” said he [the pedlar] ; “you that have lived sae lang in Zetland, to risk the saving of a drowning man? Wot ye not, if you bring him to life again, he will be sure to do you some capital injury?” ¹⁷⁾

「気は確かかぬ」と彼 [行商人] が言った。「ツェトランドでこれまで長く生きてきたのは、溺れてる者を救う危険を冒すためですかね。たとえ奴の命を救ったところで、奴のほうがかきとお前さんを死ぬめに遭わせることになるのを、お前さん、知らないのかね。」

この行商人のように、敢えて「非情」を断行する人々の心には、いったい何があるのであろうか。この疑問を解決するには、この俗信に関する人々の「確信」の内容 — 皮相的及び真相的 — を吟味する必要があるであろう。

その確信とは、「人が溺死するのは、水の精に捕えられたり、川の神が生贄を要求したりするためであり」¹⁸⁾ 言わばそれは「神のご意志」によるもの故に、「これに背いて救出を図るのはよろしくなからう」というものである。つまり、これは人々のこの俗信に関する「皮相的確信」であり、言わば「綺麗事」でもある。

ところで、人々が溺れる者を目の当たりにするとき、救出に乗り出そうとしても、もしかするとその瞬間には、救出をする上で危険を冒すという恐怖心とか、また身体の緊張状態等が募り、どうしても救出ができない状態になってしまい、その結果、やむを得ず「非情」を断行してしまう、ということも実際あるかもしれない。しかしながら、人々をこの「非情」に踏み切らせるのには、このこと以上にもっと強力な何かがあるように思える。それは、外ならぬ「罰を受けるといけないから」という恐怖、しかもそれは、T. S. Knowlson の言うように、「今度は自分が溺死しなければならない羽目に陥るから」¹⁹⁾ という、生きていく者にとっての「極限の恐怖 (とも言えそうなもの)」であるように思える。実はこれが、人々のこの俗信に関する「真相的確信」ではないか、と思えるのである。上掲の用例中においても、確かにその「極限の恐怖」が「警告」となって現れているようである。この点で、Knowlson のこの「本音説」は、大いに同意できるものに思える。尚、「溺れる者を見つけても、それは神の思し召し故に、そのままにしておくのがよろしかろう」というこの教訓は、『聖書』には記載されていない。

4. 死者が出たらすぐなされるべきこと

家族等が亡くなった場合、すぐに次のようなことがなされるべきとされる。

* 「死者の目は必ず閉じさせる。このことは埋葬時まで注意を払う。」²⁰⁾ 今日も同じことが言われるが、この謂れは、「死者は皆生者を羨む」²¹⁾ からだ、とされる。

* 「死者の霊魂が天に飛び立つのを妨げないように、家の戸や窓を開け放つ。」²²⁾

* 「窓のブラインドを閉める習わしがある。」²³⁾ この頃でも、これを実際に行う場合が大いにあると言われる。

* 「死者の部屋の鏡は勿論、場合によっては家の中の鏡も、覆いをするかまたは裏返しておくべき」²⁴⁾ とされる。何故こうすべきかについては、考え方が二つに分かれているようである。一つは Charles Kightly の挙げる、「死者の魂が鏡に取り込まれてしまい、後で家族の者が鏡を使用する際に、その肩ごしに魂が現れる」²⁵⁾ という考え方である。もう一つは J. G. Frazer の挙げる、「鏡に映る人の姿はその人の魂だが、その魂が、埋葬までは普通辺りにうろついているとされる死者の霊によって、連れて行かれる恐れがある」²⁶⁾ という考え方である。この二つの考え方を、Paul Barber の次の記述と照合してみたい。

... Usually it is explained as a means of preventing the dead from returning or preventing another death from occurring. ²⁷⁾

... 普通それは、死者が戻ってこないようにするためとか、次の死者が出ないようにするための方策だと説明される。

前者 Kightly の考えは、Barber の言う「死者の戻りの防止」に相当し、後者 Frazer のそれは、Barber の言う「次の死者の出の防止」に相当しており、結局 Barber の考え方は、昔からある二つの考え方をまとめたものであることが判る。いずれの考え方にしても、それは、「鏡には人の魂や霊が映る」²⁸⁾ とか、また「鏡は ‘the other side = the afterlife (来世)’ への通路の役目を果たすもの」²⁹⁾ という古い時代の確信に根ざしたものである。しかし、今日においても英米の人々は、まさに習慣としてこれをよく実行するようである。

* 「家の掃き掃除やちり払い等をしてはならない。」³⁰⁾ これはこの行為によって、死者の魂とぶつかったり、それを追い立てることになる恐れがあるから、とされる。

* 「家畜と植物にも家族が死亡したことを知らせ、家畜小屋の出入り口や巣箱に喪章（黒リボン等）を付れたり、植物にはそれを巻いてやらなければならない。さもないと、家畜が死亡したりいなくなったり、また植物なら枯れてしまう」³¹⁾ と信じられる。動物のうち、今日でも特にミツバチにはそれを知らせ、巣箱に喪章を付する場合がある。この用例として、Alvin Schwartz は、ニューイングランドの John G. Whittier の *Telling the Bees* (1858) を紹介しており、³²⁾ その詩の終末にはこう記されてある。

“Stay at home, pretty bees, fly not hence! Mistress Mary is dead and

gone!”³³⁾

「家にいておくれ、かわいいミツバチたちよ、ここから飛んで行かないでおくれ！メアリー奥さんが、亡くなったのだよ！」

* 「死者が出たら、ミツバチの巣を家の鉄の鍵で三度たたいて死を知らせ、黒リボンを付す。」³⁴⁾ (また、「出棺前あるいは埋葬時に、ミツバチの巣箱をぐるりと回してそれを知らせる」³⁵⁾とも言われる。)

* 「暖炉やかまどの火をいったんは消す。」³⁶⁾

* 「時計を止める。」³⁷⁾ 一般にこの理由は、時間という「有限のもの」は死者には必要がなくなるからだ、と言われる。ところが、これとは全く異なる理由もあり、その一例として Claudia de Lys の記する理由は興味深い。

There are various superstitions which, if followed, will prevent dreaded events. One is that it is best to stop the clock at the moment of a person's death, to limit the power of death by introducing a new period of time. The clock must be started again after the funeral, when a new cycle of time is supposed to begin.³⁸⁾

もし守れば、恐ろしい出来事を防止できるような様々な迷信がある。一つは、誰かが死亡するとすぐに時計を止めるのが最良だ、というものである。それは、新たな「時」を導入することによって、死の力の勢いを押さえるためである。時計は葬儀後に、新たな「時の周期」が始まるとされる時に、再び動かしてやらねばならない。

Lys の記述は、「時間の次元を改めることによって、『死のパワー』を押さえるために」時計を止める、という考え方である。昔の人々にとっては、「死の訪れ」はすべてにおいて、この世のものとは異なる「別世界の訪れ」を意味した。人々は、その世界の恐ろしいパワーをいかにすれば防げるかと知恵を絞った結果、「時間の次元の入れ替え」という卓抜した考えに至ったのであろう。

* 「生き物が死体や棺に飛びつくと大変に不吉なので、寄せつけないようにする。」³⁹⁾ これは特にイギリス北部地方でよく言われるようであるが、Orkney Islands でも、「家にいるネコはことごとく閉じ込めるべき」⁴⁰⁾とされるようである。また、どんな動物でもそうした場合には縁起直ちに殺害されるべきである、との考え方があったようであり、Radford は、「ネコが出棺前の棺に飛びつき殺害された事例」⁴¹⁾を挙げている。

この俗信については、どうもネコのことだけが特にうるさく言われるようである。これについて、W. Carew Hazlitt は「肉食動物であるネコが、人々の眠っている間に死者に近づかぬようにするため」⁴²⁾という理由を挙げているが、更にこの理由につけ加えるものとして、

中世における「ネコは魔女の使い魔」⁴³⁾という人々の確信から派生する理由も考えられるのではないと思われる。つまり、「猫が遺体に飛びつけば、悪魔や魔女が死者に取り付き、それが次の死者を誘うことになる」と考える訳である。

C. ディケンズの *Bleak House* (1852) の中で、孤独な下宿人の法律家が死亡し、その部屋に集まった下宿屋の主人クルック氏や、その他数名の人々が部屋を出ようとするとき、

‘Don’t leave the cat there!’ says the surgeon: ‘that won’t do!’ Mr. Krook therefore drives her out before him;⁴⁴⁾

「そこにネコを置いて行かないように！」と医師は言う。「そいつはためになりませんぞ！」クルック氏は、それ故に、医師が出るより先にネコを追い出す。

という場面がある。クルック氏には、彼の飼いネコがついてきていたのである。ここでの医師の言葉は、考えようによっては、単に「俗信」にこだわったとばかりは言えない雰囲気— 一起こりそうな現実を心配した様子— が窺えそうに思える。

* 「死者を一人にしておいたり、また暗い所に放置したり、施錠した部屋に一人で置いておくようなことはしてはならない。」⁴⁵⁾ これは、元来、死者に対して悪霊がいたずらをするといけなから、と考えられたためである〔8「通夜」の項参照〕。

* 「遺体をベッドに横たえるとき、その足部がドアのほうに向くようにする。」特にアイルランド系カトリックの人々の間では、これが実行されるようである。⁴⁶⁾

* 「死者に、ワインと食物を供える。」ワインについては、家族や知己は、死者のグラスにカチッと乾杯の音をさせ、ともに飲むのがよいとされる。⁴⁷⁾ 尚、「酒類は死者の旅立ちを手助けし、かつその罪を洗い流してくれるもの」⁴⁸⁾と考えられている。

* 「壺等に蜂蜜を入れて死者の傍に置いておく。」これは、死者の魂がハエになって飛んで行きたいと願うとき、その滋養物として蜂蜜が必要だ、と考えられるためである。⁴⁹⁾

* 「遺体（または納棺後なら棺）の傍に、ろうそく（一般に13本）を灯す。」⁵⁰⁾ これについては、電灯の発達した今日でも、ろうそくを用いることが多いようである。ろうそくの使用は、「悪霊除け」が本来の目的である。またろうそくは、「死の暗やみを照らし、来世の明かりを表すもの」⁵¹⁾とも考えられる。

* 「塩を小皿に盛って遺体の胸の上に置く。」⁵²⁾ 古来、塩もろうそくと同様に「悪霊除け」になると信じられている。この「塩」を用いる習慣に関して、Charles Hardwick は、「腸に空気が入り遺体が膨れるのを防止するため」という Douce の古風な説をも紹介し、更に「塩は ‘eternity (永遠)’ や ‘immortality (不滅)’ を表象するので、悪魔に酷く嫌われる」という考え方があることをも示している。⁵³⁾ 尚、この習慣については、「塩と土が、一皿に分けて盛られる場合もある」⁵⁴⁾と言われる。

* 「教会に知らせ、弔いの鐘 (passing bell) を鳴らしてもらう。」この風習は、この頃で

は極めて少なくなっていると言われるが、教区によっては今猶実施されているところも現にあるようである。昔風の考え方によれば、この鐘は「教区の人々に、死者への祈りを促す」役目と、もう一つ、「悪霊から死者の魂を護る」役目があるとされる。⁵⁵⁾

この弔鐘は、死者によって鳴らす数に違いがあり一男性9つ、女性6つ、子供3つとされ一この区別がなされた後で、その故人が生きた年数だけの数を鳴らす。⁵⁶⁾この弔鐘に関して、古くから伝えられる諺‘Nine tailors make a man.’⁵⁷⁾がある。この諺は、表面的意味が、「仕立屋九人で男一人前」であり、「仕立屋は職業柄体力が弱く、九人寄って初めて一人前の力になる」という意味として、仕立屋に対する冷やかし、悪口として使われたりもする。しかしながら、この諺は、本来仕立屋には関係がなかったのである。これは、死者が一人前の男なら鐘が9つ鳴らされたことから、‘Nine tellers make a man.’であったものが、‘tellers (=strokes 鐘が鳴ること)’から‘tailors (仕立屋)’への「訛」つまり「音の滑り」によってできたものとされる。⁵⁸⁾

因みに、かつて鐘は、教区の瀕死者を慰めるためにも鳴らされたし、また死の直後にも、また教会での礼拝式の前にも、更に、埋葬の前とその後にも鳴らされたものである。

5. 葬儀の準備

今日では、医師の死亡証明書を役所に届け埋葬許可をとる。一般的には、葬儀屋 (undertaker; 米 mortician) に委託して大方のことを運んでもらう場合が多いようであるが、遺体をアルコールで浄めきちんとした衣服を着せること等は、死者の身内知己によってなされる場合が多い。この衣服については、かつてのように経帷子 (shroud) ^{きょうかたびら} — 白色の死装束 — を着せることは極めて少なく、一般に普通の衣服を着せる。しかし、結婚後間もなくして死亡した婦人の場合には、結婚衣装が着せられたりもする。また、中には特に結婚時の衣装等着用の希望を言い置く者も男女ともにあるが、この謂れについて Zolar は、「それが死者のすべての罪を洗い流してくれるから」⁵⁹⁾としている。また、聖職者や軍人等の場合には、今日でもその祭服や制服を着用させるのが普通のものである。

その間に、葬儀屋は遺体に防腐剤を注射し、ドライアイス等で防腐処置をし、死者の納棺を手伝う。棺は今では例外なく寝棺で、鉛製の内棺と、更にその外が木製の棺になっているものがよく使われる。最近の棺は豪華で、大変高価なものが多いと言われる。

*「空の棺は、遺体のある部屋に置いておく。」これを別の部屋等に置いておくと、一年以内に家族の者が死亡する。これは、今日でもマサチューセッツ州辺りでは言われる。⁶⁰⁾

棺には白ユリ — 代表的な葬儀の花 (結婚式の花でもある) — 等の花や飾り物が詰められるが、その他ツゲ (box) やイチイ (yew) 等の小枝もよく入れられる。尚、かつて1860年代頃までは、花は「異教的風習」かつ「新生」を象徴するものとして、葬儀には相応しくないとされ、棺にも墓にも使われなかった。こうした時代には、ツゲ、イチイ、そして特にマンネンロウ (rosemary [結婚式にも使われる]) 等が用いられた。⁶¹⁾

* 「棺にはタチジャコウソウ、つまりタイム (thyme) は入れないもの」とされた。特に、Derbyshire ではこう言われた。死者には thyme=タイム (時間) という有限なものは無縁である、と考えられたためである。⁶²⁾

* 「遺体の納棺時には、経帷子の紐等はすべて切っておく。さもなければ、死者が休息しないで動きまわる。」⁶³⁾ これは、スコットランドの高地地方やアイルランドの風習で、今日でもこだわる場合があると言われる。

古い時代、少なくとも十七世紀初め以前には、棺は格別に裕福な者だけに使われ、一般の者や貧しい者の場合は、ネルの経帷子あるいは白布に包んだだけで埋葬された。⁶⁴⁾ その後、貧しい人々のために、特に共同の棺 (paupers' coffin) が多くの教会で備えられるようになったようであるが、それは、埋葬時にその底板以外の枠部分が引き上げられ、またそれが使われるという式のものであった。⁶⁵⁾ Tad Tuleja の記述によると、「棺桶製造の専門業者が現れたのは十八世紀後半」とされている。⁶⁶⁾

こうして遺体を整え、棺に納めて応接間や居間に普通二、三日安置し、身内知己は死者との別れを惜しみ、またその間には弔問客も訪れ、死者に草花、花輪、十字架等を贈る。

* 「遺体を日曜日を越えるまで家に置いては、年内に、家族に死者が出る。」これは、今猶アメリカ北東部地域で言われる。⁶⁷⁾ また、「一週間以内に、村に死者が出る」とも言われる。⁶⁸⁾

* 「死体を普通以上に長く家に置くと、間もなく家族にまた死者が出る。」⁶⁹⁾

アメリカでは一般に、役所の手続きを終えると遺体は家には置かず、'funeral home (葬儀堂)' と呼ばれる小さな教会のようなところに運ばれることが多い。連絡をすると、葬儀屋 (mortician) がいっさいのことを引き受けてくれる仕組みになっており、遺体を取りにきて、防腐処置、飾りつけ、入棺等のすべてのことを済ませ、弔問客がいつきてもよいようにしておいてくれる。また、葬儀もここで行われることが多いが、カトリック教徒はもっぱら教会で葬儀をする。

葬儀堂の利用は、現代風の合理主義に基づく方策であろうが、こうした風潮がアメリカで初めからあった訳ではない。これについては、「南北戦争 (1861-5) 後においても、死者との対面や通夜は、まだ一般に家庭の『居間』でなされていた」⁷⁰⁾ という Tuleja の記述から推測して、この風潮は十九世紀末ないしは今世紀初め頃に始まったもの、と考えられる。

アメリカでよく見られた習慣に、忌中の家のドアに付けられた黒色のクレープの喪章 (funeral sign) 一丸い花形に 2 本の長い尾を垂らしたもの一がある。しかしながら、この習慣も次第に廃れ、この頃では花を用いる傾向がある、⁷¹⁾ と言われる。その他、アメリカでは時々、棺に入った死者の「死に顔写真」を撮っておき、葬儀に参列できなかった者とか、参列した者でも縁者等には、後日それを配布したりする習慣がある。

6. 副葬品

死者の副葬品は、死者が来世への旅や、そこでの生活に必要なと思われる身の回り品その

他である。大昔には、棺に武器が入れられたりもしたが、今では、故人の愛用したパイプとか、婦人なら鏡等が副葬される。また、敬虔な信者の場合には、聖書、賛美歌集、日曜学校の証書等が棺に入れられる。また、明かりになるようにとろうそく、元気が出るようにとワインや食物、それにコイン [次の7項参照] 等も入れられる。また、子供の場合には玩具も忘れてはならない。また、時としてこれらに加えられるもので、いくぶん奇異に思われるものにハンマーがある。これは、死者が目的地に着いた時、その扉等をたたいたり打ち破るために必要なもの、と考えられるようである。⁷²⁾

尚、結婚指輪については意見が両様あるが、現在では付けたまま埋葬するのが普通になっているようである。ウェスト・ヨークシャーその他では、昔は、指輪を付けたまま埋葬するのは死出の旅に相応しくない、と考えられたようである。⁷³⁾

Zolar は、「棺指輪 (coffin ring) をはめていけば、リュウマチの治療になる」とサマーセット州の俗信を挙げ、「この伝統が基になって、関節炎の治療に銅の指輪や腕輪が用いられている」と記している。⁷⁴⁾ これに関連して Radford は、「かつてこの種の指輪は、棺に取り付けられてある銀の蝶番ちょうがひから作られた」⁷⁵⁾ と述べ、「棺指輪」という名称の由来を窺わせている。尚、この習慣は今もサマーセット州やランカシャー州で見られるが、今日の人々が付けているのは、勿論、棺の金具から作ったものではなく、メッキものや、亜鉛製と銅製の二輪組み合わせの棺指輪が多い、と言われる。⁷⁶⁾

7. 死者の両眼にコインを載せる！

しばしば、副葬品にはコインが含まれる。それは、死者が天国に至るまでの旅で必要とされる金銭である。以下の4つの習慣は、今日でもよく見られるものである。

* 「死者の口に1ペニー硬貨(等のコイン)を入れる。」これは、死の川の渡し守、恐らくは使徒ペテロ (St. Peter) に払うための渡し賃であろう、と言われる。⁷⁷⁾ 実はこの習慣は、ギリシア時代の風習にそのルーツがあるとされ、「ギリシアでは、黄泉よみの国の川の渡し守カロン⁷⁸⁾に与える渡し賃が必要とされたので、死者の口にコインをくわえさせた」というものである。⁷⁹⁾

* 「死者の片手にコインを握らせておく。」⁸⁰⁾ Hazlitt は、かつて1016年にブリテン島に侵攻してきたデーン人のカヌート王 (994? -1035)⁸¹⁾ について、Winchester にあるその墓が発掘されたとき、王が片手に銀貨を握っていたという事実を言及している。⁸²⁾ このような最高に偉大な王権者でさえも、いわゆる三途の川の渡し賃は必要だったものと見える。

* 「死者の口に宝石を入れる。」これもコインと同じ意味合いを持っているが、宝石の場合は更に、肉体の腐敗を防止し「不滅」をもたらす効用がある、と信じられた。⁸³⁾

* 「死者の眼に1ペニー硬貨(等のコイン)を載せる。」⁸⁴⁾ コインが天国への「旅の路銀」という意味合いを持つことは了解できるとして、では何故それを眼に載せるのか、という疑問がやはり残るであろう。これについては、「死者に、あの世への旅の道ずれを物色する

のをやめさせるため」⁸⁵⁾という理由が挙げられるようである。これに関しては、「死者は皆生者を羨むものだ[4で既述]」という生者にとっての恐怖を考えると、この理由はまさに妥当なものに思われる。

J.スタインベックの1939年作『怒りの葡萄 (*The Grapes of Wrath*)』には、この風習のアメリカ版が記されている。Oklahomaのトム一家が、新しい生活を求めてCaliforniaを目指しおんぼろトラックで旅をする途中、老いた祖父が卒中で倒れ死亡する。次の引用は、トムの母親が、その遺体の身繕いをする場面である。

Ma said : 'Gimme two half-dollars.' Pa dug in his pocket and gave her the silver. She found the basin, filled it full of water, and went into the tent. . . . For a moment Ma looked down at the dead old man. And then in pity she tore a strip from her own apron and tied up his jaw. She straightened his limbs, folded his hands over his chest. She held his eyelids down and laid a silver piece on each one. She buttoned his shirt and washed his face. ⁸⁶⁾

母親が言った。「50セント銀貨を二枚くださいな。」父親はポケットを探り銀貨を渡した。母親は洗面器を見つけ、それに水を満たしてテントに入って行った。 . . . 少しの間、母親は死んだ老人を見下ろしていた。それから、悲しそうに自分のエプロンの端を切り裂き老人の顎を縛った。次に祖父の足をまっすぐに伸ばし、両手を折り曲げて胸の上に置いた。両脇をなで下ろし、その上に銀貨を一枚ずつ載せた。老人のシャツのボタンをかけ、顔を洗ってやった。

因みに、この風習について、それは「アメリカに独特なもの」とか、「イギリスにあるかどうか疑問」とする一部の日本の調査者の考えに対して若干の示唆を許されれば、この習慣は古代ギリシア人以来の伝承で、かつてヨーロッパに広く行き渡ったものであり、今日のイギリスでもその習慣は時として見られるし、また新大陸アメリカへも開拓時代に持って行かれ、そこで今日も一部生き残っているようである。

8. 一部に残る「通夜 (wake)」の風習

ここで言う「通夜」とは、夜通し死者を見守る「寝ずの番」を意味する。「現在、英米には、英国の一部の地域を除いて通夜の習慣はない」とされるが、それは「寝ずの番の習慣がない」と解すべきである。今日でも、「寝ずの番」とまではいかなくとも、「死者の出た日の夜等に、英米の家庭で、また米国の場合特に葬儀堂で、家族や縁者また親しい者が死者の霊のために祈り、別れを惜しむ習慣」は大いにある。従って、考えようによっては、「(軽い意味の) 通夜」と見做し得るような習慣は存在するのである。

ずっと古い時代、英国には一般に、夜通し死者を見守る「通夜」の風習があったとされる。通夜は、家庭のみならず教会でも催された。教会での通夜は、夜が明けたときに人々が、“Holy Wake! Holy Wake!” と大声で叫び合って終了になった、と言われる。⁸⁷⁾特に家庭での通夜の場合には、「飲み食いをし、大いに賑やかにお祭り騒ぎをするもの」⁸⁸⁾であったとされ、また別名 ‘revelling (お祭りの酒盛り)’ とか ‘hopping (飛びはね踊り)’⁸⁹⁾とも称されたようである。研究社刊『英語歳時記』には、それを裏づけるものとして、十四世紀末頃に書かれた G. チョーサーの『カンタベリー物語 (The Canterbury Tales)』の『騎士の話 (The Knightes Tale)』の一節が、次のように紹介されている。⁹⁰⁾

Ne how Arcite is brent to asshe colde ; /Ne how that liche-wake was
y-holde /Al thilke night, ne how the Grekes pleye /The wake-pleyes, ne
kepe I nat to seye ; /Who wrastleth best naked, with oille enoynt, /Ne
who that bar him best, in no disjoint. ⁹¹⁾

アーサイトが冷たい灰となり、その夜どおし通夜があったことも、ギリシア人が通夜の競技会をやったことも、ここで述べるつもりはない。油を塗ってだれが裸ずもうに勝ったか、だれがしくじらずに勝ちぬいたか、も。^[90)]

しかし、このようないわゆる「どんちゃん騒ぎの通夜」も次第に改められ、祈りを大いに取り入れたり、聖書の言葉を唱和したりする雰囲気が強くなってきたようである。通夜の風習は、こうしてやや静かな性格を持つものになりつつ、地域によっては十九世紀末まで続いた。⁹²⁾しかしながら、それ以後通夜は一般的に廃れてしまい、現在ではアイルランド、それにスコットランドのカトリックの信者の間でしか見られなくなっており、しかも農村でないと見られないというのが実情である。

アイルランドやスコットランドの通夜では、死者の周りにろうそくが灯され、その周りで関係者一同が賑やかに飲み食いをして騒ぐ。「酒は死者の旅立ちを手助けし、かつその罪を洗い流してくれるもの [4 で既述]」と信じられるので、大いに飲むべきものとされる。やがて遺体を納棺する用意ができると、遺体に「塩」が振りかけられる。棺の中の遺体の傍には飲食物が供えられ、その他の副葬品等も入れられる。そして、James Kircup の記すように、

As the wake proceeds, the mourners become very drunk and noisy and
start dancing and singing round the corpse. ⁹³⁾

通夜が進むにつれて、弔問者たちは大変酔っ払い騒がしくなり、遺体の周りで踊ったり歌ったりし始める。

また場合によると、防腐処置を済ませ化粧をもした死者を豪華な椅子に座らせ、ぶどう酒を注ぎ、共に飲みながら別れを惜しむようなこともある、と言われる。人々はこうして

賑やかに振る舞っても、涙を流す様子は見せないのである。これに関連して、アイルランドの農村によっては、今日でも次のようなことが言われる。

*「人が死亡した後、3時間は涙を流してはならない。」Kircupも記しているように、人々は、「死者の魂が、肉体とこの世の境界から逃れる機会をつかめるように」⁹⁴⁾少なくともしばらくは涙を流してはならない、と戒められている。

ところで、通夜のこのような「お祭り騒ぎ」には、元来その役目（意味）があったはずである。この点に関して、Tulejaは二つの役目を挙げている。一つは心理的なもので、「明白な現実を否定し、涙を流さないように道化の顔をする」ことであり、二つ目は社会的なもので、寝ずの番をして「本当に死んでいるかどうかを試してみようとするものかもしれない」としている。⁹⁵⁾一つ目については、涙は死者の天国行きを妨げるので「泣かないために」賑やかに振る舞う、という点で納得できそうに思える。二つ目は、それが太古の時代から、いずれの社会においても当然な習慣—遺体を数日安置して、生き返ることが絶対にないかどうかを確かめること—だと思われるので、大いに納得できる。従って、Tulejaの挙げるこの二点については、大いにうなずけるのである。

また、その他の役目として、Reader's Digest Associationの刊行物の記述では、「死者への思いやりと敬意を表する」役目、「遺族への慰め」の役目、かつ「悪霊を寄せつけないようにして、死者の旅の安全を願う」役目の三つを挙げている。⁹⁶⁾このうち「悪霊云々」については、De Lysも同様の見解を示しており、⁹⁷⁾三つとも同意できる役目である。また、Vriesも「悪霊云々」については同見解であるが、彼は更に、「死者と一緒に飲み騒ぎ、死者に仲間意識を抱かせることによって、生者に危害を加えないようにさせるため」⁹⁸⁾を挙げている。これも納得できそうに思える。

更に、Jobesは二つの役目を挙げている。一つは、「死者の魂に、あの世から戻ってこさせようとするため」であり、二つ目は、「死者の魂が、不滅の世界に目覚めることを祝福するため」である。⁹⁹⁾このうち、後者のほうについては、アイルランドの人々が通夜で涙を流さぬのは、このことが主要な根拠の一つである故に、これは大いに納得がいく。しかしながら、前者については納得がいきかねるのである。死者への愛着が極めて強烈な場合等に、天国に飛び立った（飛び立とうとしている）その魂を、何とかして呼び戻したいと思うあまり、「死のパワー」の怖さなど意に介さぬという状態で、個人ならず多数の人々が「お祭り騒ぎ」をすることが考えられるであろうか。それは、「死のパワー」を恐れた昔の人々の行動としては、やや不自然ではないかと思われる。むしろ逆に、天にも届けとばかりに泣き叫び、魂を呼び戻そうとするほうが素直な行動かもしれない。結局、この役目は、二つ目の役目の内容に相反するものであり、不適切なものと考えられる。ただし、これも考えようで、Tulejaの挙げる二つ目の役目—本当に事切れているかどうかの確認—と同じ意味合い(?)だと考えるのなら、全くもって解らない訳ではない。

この通夜の「お祭り騒ぎ」には、ここに挙げたいくつかの役目以外に、もう一つ次の役

目があるのではないかと思われる。それは信仰心に根ざすものである。「死とは神によって召されること」と信じる人々の心の奥底には、通夜の際に「神様、どうかお忘れなく、またお見捨てなく、この者に、天国へのお導きを賜わらんことを」という神への純朴な願いがあるのではないだろうか。そこで人々は、「死者のために、神の注目を確実に集めておく必要がある」そのためにも大いに賑やかに振る舞い、「お祭り騒ぎ」の通夜をすることになったのではないだろうか、と推測するのである。

9. 弔問と「弔いの膳」

かつては、弔問客に、遺体の上を横切って、コインとともに「弔いの膳（ワインまたはビール・パン等の食物）」を出す風習があった。特に、「ウエールズの各地では伝統的な習慣であった。この風習は、『十七世紀の‘sin-eating（罪食い）’の慣習』¹⁰⁰⁾の名残かもしれない」との見方がある。¹⁰¹⁾これは死者の前で、その生前の罪を食ってしまい、死者が今後現世をさまよい歩かないで済むようにしてやることである。しかしながら、この風習も次第に廃れ、後には近所の貧民への酒食の施しに変わっていったようである。

次は弔問時の留意事項である。

- * 「死者の悪口を言ってはならない。」これについては、「いい人でしたのに . . .」という類の言葉以外は慎むべきとされる。¹⁰²⁾
- * 「弔問をした際には、死者の顔を見ないで帰っては非礼である」¹⁰³⁾とされる。
- * 「死者が安置されてある部屋に出入りするときは、死者に背中を向けないようにする。背中を向けると、死者の気持ちを傷つけることになる」¹⁰⁴⁾とされる。
- * 「弔問者は、遺体に涙を落としてはならない。それは死者の休息を妨げることになる。」¹⁰⁵⁾これは一般的に言われるようである。
- * 「弔問者は、遺体（額など）に手を置くことを忘れてはならない。」この習慣は今日でも、イングランド北部やスコットランドではよく見られ、また、アメリカでも植民時代以来行われており、今も、特にマサチューセッツ州等ではよく見られる。これは、「故人に対して愛情と敬意を表する行為と考えられ、また、こうすることによって死者の霊に付き纏われることがなくなるとか、死者の夢を見ないで済む」と信じられる。¹⁰⁶⁾

この習慣の本来の由来は、「殺害者が近づいたり（手を触れたり）すると、死体は血を吹き出す」¹⁰⁷⁾という古い伝承にあるとされる。この用例として、W.シェイクスピアの『リチャード三世 (*King Richard III*)』(1592-3)の中に、ヘンリー王の棺が運ばれる途中で殺害犯グロスター伯爵が現れ、棺の側にいた喪主アンが大憤慨する箇所がある。

O, gentlemen, see, see! dead Henry's wounds /Open their congeal'd mouths, and bleed afresh! — /. . ./For 'tis thy presence that exhales this blood /From cold and empty veins, where no blood dwells ; /Thy deed, inhuman, and unnatural, /Provokes this deluge most unnatural. —¹⁰⁸⁾

おお、皆さんご覧なさい！ 亡きヘンリー王の傷口が、血で固まった口を開け、血を吹いておりますわ！— . . . 傷口が新たに血を吹くのは、あなたがここにいてせいですわ。一滴の血もない、冷たい空の血管のはずなのに。あなたの、天をも人をも顧みない行いが、かくも不思議な血潮を、吹かしめるのです。—

弔問者は遺体に手を触れることによって、自分が手を下してはいない（広い意味では、生前の故人に対して酷いことはしていない）ことを証明できる、という訳である。

む す び

人の「死の訪れ」から「葬儀準備」「通夜」「弔問」に至るまでの英米人の「風習」の概要と、そこに見出される種々の「迷信・俗信」を考察してきたが、これに関して特に肝要と思われることがある。それは、英米の人々の「死についての考え方及び伝統・習慣」に対して、その見方を誤ってはならないということである。つまり、たとえ傍目からはいかに「迷信・俗信」の類と見えようとも、それが人々の暮らしの中で息づいている限りは、それを「迷信・俗信ときめつけてしまうことは決して許されない」ということである。

当稿の冒頭で挙げ本文でも扱った「アイルランドの通夜」のように、その地域に息づく「伝統・習慣」こそは、その地域の人々の「文化」であり「心」なのである。それを、自らの文化における伝統・習慣との比較により見出される単なる相違点等を根拠に、その人々の「文化」すなわち「心」を、頑冥不霊の姿勢でもって過小評価してはならないのである。むしろそれは、大いに尊重し敬意を表すべきものであろう。また、ひいては、こうした姿勢を持つことこそは、人々が「地球社会での異文化間の真の相互理解」を目指す上で、まさに出発点になるものと思われるのである。

〈その3 「葬儀・埋葬・服喪」に続く。〉

Acknowledgments

貴重なご教示をいただいた Piers Dowding（岡山商科大）、Amy Staley（中国短期大）、Matthew Main（岡山理科大）、Laurence Anthony（同）の各氏に厚くお礼申し上げたい。

Notes

- 1) “Death at Low Tide,” *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York : Philosophical Lib., 1949 ; New York : Greenwood, 1969) 100 (L).
- 2) “Death at Low Tide,” Radford 100 (R).
- 3) Charles Dickens, *The Personal History of David Copperfield XXX*, *The Oxford Illustrated Dickens* (1948 ; Oxford : Oxford UP, 1991) 445.
- 4) William Shakespeare, *Henry V II-III*, *Malone’s Shakespeare*, ed. Edmond Malone, vol.5 (London, 1790 ; New York : AMS, 1968) 491, 10 vols.

- 5) "Death at Low Tide," Radford 100 (L).
- 6) Edmond Malone, notes, *Henry V* II-III, by William Shakespeare, *Malone's Shakespeare*, ed. Edmond Malone, vol. 5 (London, 1790 ; New York : AMS, 1968) 492.
- 7) James Kircup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo : Asahi, 1975) 31.
The waning of the moon is also a time for death, according to the superstitious.
- 8) "Death," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam : North-Holland, 1974) 131 (R), IV-C-b.
- 9) "Death," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London : Simon 1989) 108.
- 10) Sir Walter Scott, *Guy Mannering* 27th, *Waverley Novels*, Centenary ed., vol. II (Edinburgh : Adam & Charles Black, 1871) 185.
- 11) Reader's Digest Association ed., *Folklore, Myths and Legends of Britain*, 2nd ed. (London : Reader's Digest Assn., 1977) 89 (R).
- 12) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 13) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 14) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 15) Charles Francis Potter, "Burial," *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend*, ed. Maria Leach and Jerome Fried (1949 ; New York : Funk, 1972) 172 (R).
- 16) T. Sharper Knowlson, *The Origins of Popular Superstitions and Customs* (1910 ; London : T. Werner Laurie, 1930) 231.
- 17) Scott, *Pirate* 7th, *Waverley Novels*, vol. XIII, 86.
- 18) "Drowning," De Vries 149 (L), 5-A.
- 19) Knowlson 231-2.
The idea seems to be this : that when a man is drowning it is the intention of the gods that he should be drowned ; and that the rescuer, if successful in rescuing him, must be the substitute and be drowned himself later on. You cannot cheat Fate out of life ; that appears to be the argument.
- 20) Peter Lorie, *Superstitions*, (New York : Simon, 1992) 249 (L).
- 21) Charles Francis Potter, "Funeral Customs and Beliefs," *Funk & Wagnalls Dict.*, Leach and Fried 428 (L).
- 22) "Death," Zolar 108.
- 23) "Funeral," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London : Thames and Hudson, 1986) 118 (R).
- 24) "Funeral," Kightly 118 (R).
- 25) "Funeral," Kightly 118 (R).
- 26) Sir James G. Frazer, *The Golden Bough*, Abridged ed. (1922 ; London : Papermac [Macmillan], 1991) 192.
It is feared that the soul, projected out of the person in the shape of his reflection in the mirror, may be carried off by the ghost of the departed, which is commonly supposed to linger about the house till the burial.
- 27) Paul Barber, *Vampires, Burial, and Death* (New Haven, CT : Yale UP, 1988) 180.
- 28) "Mirror," *Old Age in Myth and Symbol*, ed. Jennifer McLerran and Patrick McKee (Westport, CT : Greenwood, 1991) 91.
- 29) "Mirror," McLerran and McKee 92.
- 30) "Funeral," Zolar 163.
- 31) Reader's Digest Assn. 89 (R)—90 (L).

- 32) Alvin Schwartz, notes : *Telling the bees, Cross Your Fingers, Spit in Your Hat*, ed. Alvin Schwartz (New York : Harper Collins, 1974) 138.
- 33) John Greenleaf Whittier, *Telling the Bees*, among *Narrative and Legendary Poems in The Writings of John Greenleaf Whittier*, vol. 1 (1848 ; Cambridge : Riverside, 1888) 188, 7 vols.
- 34) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 35) Knowlson 209—10.
- 36) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 37) Reader's Digest Assn. 89 (R).
- 38) Claudia de Lys, *A Treasury of Superstitions* (New York : Philosophical Lib., 1957) 275.
- 39) "Corpse," Zolar 95.
- 40) "Ceremonial Customs : Funeral," *County Folk-lore, concering Orkney & Shetland Islands*, collected by G. F. Black, ed. Northcote W. Thomas, vol.3 (Folk-lore Society, 1901 ; Nendeln/Liechtenstein, Germany : Kraus Reprint, 1967) 211.
- 41) "Corpse," Radford 87 (R).
One clergyman in particular, the Rev. J. F. Bigge, has recorded his own experience. A cat jumped over the coffin as a funeral was about to leave the house for the church, he stated. As a result nobody would leave the house until they were assured that the cat had been shot by one of the men of the family.
- 42) "Funeral Customs in Scotland," *Faiths and Folklore of British Isles*, ed. W. Carew Hazlitt, vol. 1 (1905 ; New York : Benjamin Blom, 1965) 253 (L)—(R), 2 vols., 3rd rev. of *The Popular Antiquities of Great Britain*, orig. comp. John Brand (London, 1813).
- 43) "Cat," *The Herder Dictionary of Symbols*, ed. Herder Freiburg, trans. Boris Matthews (1986 ; Wilmette, IL : Chiron, 1994) 33, orig. *Herder Lexikon : Symbole* (1978).
- 44) Dickens, *Bleak House XI, The Oxford Illustrated Dickens*, 143.
- 45) Reader's Digest Assn. 90 (L)—(R).
- 46) Fanny D. Bergen ed., *Current Superstitions* (1896 ; New York : Kraus Reprint, 1969) 131.
- 47) "Funeral," Zolar 163.
- 48) De Lys 175—6.
- 49) "Funeral," Zolar 163.
- 50) "Funerals," Kightly 118 (R).
- 51) J. C. Cooper, *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols* (1978 ; London : Thames and Hudson, 1993) 28.
- 52) "Funerals," Kightly 118 (R).
- 53) Charles Hardwick, *Traditions, Superstitions, and Folk-lore* (Manchester, 1872 ; New York : Arno, 1980) 181.
- 54) "Funeral Customs in Scotland," Hazlitt, vol. 1, 253 (L).
- 55) Knowlson 211—2.
- 56) "Death Bells," *E. & M. A. Radford Encyclopaedia of Superstitions*, ed. and rev. Christina Hole (1948 ; London : Hutchinson, 1961) 131.
- 57) "Nine tailors make a man.," *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, rev. F. P. Wilson, 3rd ed. (1935 ; Oxford : Clarendon, 1992) 567 (L).
- 58) "Death Bells," Hole 131.
- 59) "Coffin," Zolar 90.
- 60) Bergen 131.
- 61) "Funerals," Kightly 120 (R).
- 62) "Thyme," Hole 340.

In Derbyshire formerly, it was usual to bring thyme and southernwood into the house after a death, and to keep them there until the corpse was carried out for burial. But when the coffin was dressed with flowers, thyme was always omitted, 'for the dead have nothing to do with time.' This curious punning superstition is found in other counties also.

- 63) "Corpse," Radford 86 (R).
- 64) Tad Tuleja, *Curious Customs*, A Stonesong Press Book (New York : Harmony, 1987) 34.
- 65) "Funerals," Kightly 119 (L).
- 66) Tuleja 34.
- 67) Bergen 133.
- 68) "Corpse," Zolar 95.
- 69) "Corpse," Zolar 95.
- 70) Tuleja 35.
- 71) Charles Francis Potter, "Burial," *Funk & Wagnalls Dict.*, Leach and Fried 174 (L).
- 72) Reader's Digest Assn. 91 (L).
- 73) "Funerals," Kightly 119 (L).
- 74) "Coffin," Zolar 90.
- 75) "Coffin Rings," Radford 84 (L).
- 76) "Coffin Rings," Radford 84 (L).
- 77) "Funerals," Kightly 119 (L).
- 78) "Charon," *A Dictionary of World Mythology*, rev. and expanded by Arthur Cotterell, New ed. (1979 ; Oxford : Oxford UP, 1986) [Europe] 149.
- 79) "Coin," De Vries 106 (R), 5.
- 80) "Funerals," Kightly 119 (L).
- 81) F. E. Halliday, *A Concise History of England from Stonehenge to the Microchip* (1964 ; London : Thames and Hudson, 1991) 36.
 . . . the Danes renewed their attacks from Scandinavia, and in 1016 England submitted to a Danish king, Canute, becoming indeed part of a great Danish empire that included Norway as well as Denmark.
- 82) "Funeral Customs," Hazlitt, vol. 1, 251 (R).
- 83) "Gem," De Vries 212 (R), II—D—2.
- 84) "Coin," De Vries 106 (R), 7—b.
- 85) "Coin," De Vries 106 (R), 7—b.
- 86) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* 13, *The Modern Novel Series* (1939 ; London : Heinemann, 1969) 120—1.
- 87) "Wake," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobs, part 2 (New York : Scarecrow, 1962) 1662, 3 parts [vols].
- 88) Reader's Digest Assn. 90 (R)—1 (L).
- 89) "Wakes," Hazlitt, vol. 2, 615 (R).
- 90) 土井光知・福原麟太郎・山本健吉監修, 成田成寿編集, 『英語歳時記一雑』, 13版 (1968 ; 東京 : 研究社, 1986) 414.
- 91) Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales* 2957—62, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, ed. Rev. Walter W. Skeat, 2nd ed. (1894 ; Oxford : Clarendon, 1963) 84.
- 92) Reader's Digest Assn. 90 (R).
- 93) Kircup 30.
- 94) Kircup 30.

In Ireland, people hold back their tears by force of will until three hours after the person has

died in order to give his soul a chance to escape from the body and from the confines of earth.

95) Tuleja 35.

96) Reader's Digest Assn. 91 (L).

97) De Lys 176.

There are many ways and means to forestall all manner of evil, among them singing, toasting loudly, swapping jokes and laughing heartily. These jollities were traditional activities to give the corpse the proper send-off into the Great Beyond.

98) "Wake," De Vries 491, d.

99) "Wake," Jobes, part 2, 1662.

100) Reader's Digest Assn. 90 (R).

101) "Funerals," Kightly 118 (R).

102) Lorie 249.

. . . never speak ill of the dead but always utter phrases such as "poor man" or "honest man" or "rest his soul" otherwise the soul may come visiting.

103) "Funerals," Kightly 118 (R).

104) "Death," Radford 98 (R).

105) "Death," Radford 98 (R).

106) "Touching the Dead," Hole 343-4.

107) "Bleed : Bleeding of a Dead Body," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, ed. Ebenezer C. Brewer, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed., 6th impression (1870 ; London : Cassell, 1978) 121.

It was once believed that at the approach of a murderer, the blood of the murdered body gushed out. If there was the slightest change observable in the eyes, mouth, feet, or hands of a corpse the murderer was supposed to be present.

108) Shakespeare, *Richard III* I - II, *Malone's Shakespeare*, ed. Edmond Malone, vol. 6, 463-4.

Speculation concerning Superstitions
in the Cultural Background
of the English & the Americans—(3)

II DEATH Part 2 : Concerning Death,
the Preparation for Funerals and Calls of Condolence

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of Science,

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1994)

All living things in the world are doomed to death; human beings are also mortal. Since time immemorial, they have reflected upon their death and believed in what is called the future existence. This belief might be on the basis of the fact that a human being is, by nature, a creature that is likely to picture his future in his mind.

Once someone dies, people usually prepare a funeral for his soul's safe travel to the other world from this one. The preparatory process to the funeral and condolence is full of the people's manners and customs, rather often inclusive of superstitions, which could be called their own 'culture.'

In this survey, I would like to examine a variety of *Superstitions* seen in a series of events from death to the preparation for funerals and calls of condolence, including the manners and customs as their own culture.